
espionage+1

春風ななこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

espionage + 1

【Nコード】

N1468A

【作者名】

春風ななこ

【あらすじ】

主人公の香鈴は、姉との平和な暮らしをしていた。しかし、あの1本の電話で香鈴は、スパイに．．．！？

第0章*プロローグ

No.1 prologue.

11.14PM9:55。ガーデンハイツ704号室 青山マキ宅。
プルル、プルル。電話が鳴った。

「はい、ええ。」

受話器を取ったのは、青山ではなかった。

「今、済みました。」

受話器を持つているのは、私の姉だ。

「はい、分かりました。それでは。」

ガチャツ。姉は受話器をおいた。そばにあったジュラルミンケースを持ち上げ、私に声をかける。床には、ああむけになって青山が倒れていた。寝ている様だ……。そして、私と姉は、この部屋をあとにした。

その7ヶ月程前……

私の名前は、日野香鈴。17歳の高校2年生。両親は田舎にいて、姉の由来と、二人で暮らしています。姉は、26歳で、大人気雑誌『MIRUKI』の記者。

しかしあのごく普通の暮らしが狂ったのは、

あの1本の電話だった。

第1章Te1・・・（前書き）

留守番中にかかったTe1。どう見ても不審な感じ！どうなる香鈴！？

第1章 T e l . . .

日曜日の朝。6月らしく、朝から雨が降っていた。

「お姉ちゃんきょうも仕事？」

玄関でハイヒールを選んでいる姉に、文句を言う。

「そうよ。＼切り前で忙しいの。ま、なるべく早く帰るようにするから。」

「分かった。オムライス作るところか。」

姉にバッグを渡す。

「ありがと。そういえば、トイレットペーパーきれてたから買っていて。」

「はあい。じゃあね、いつてらしゃい。」

姉は、ハイヒールを履くと、忙しそうに、いつてきます、と言って出掛けて行った。

朝ごはんを食べ終わると、食器洗い機に食器を入れた。自分の部屋に戻り、宿題のレポートを書く。友達の千佳から、レポートと一緒に書く約束をしていたので、メールをしようとしたら、携帯を学校に忘れているのに気付いた。

「はあ。最悪。」

そのとき、リビングから、電話の音がした。

「はい。」（名前は後から名乗るようにしている）

『日野香鈴さんですか？』

「え、ええ。」

いきなり言われたのでびっくり。しかも、知らない男の人。

『明日の19時、香鈴さんの通っている高校の西門に来て下さい。』

「あの、よく状況が分からないんですけど。」

『いいからきてください。』

一方通行の会話に、スゴク戸惑った。

「あの、多分来れないんですけど。」

てゆーか、怪しい。

『それでも来て下さい。』

「あの、お名前は？」

『ああ、すみません。徳竹と言います。』

知らない名前。切って良い電話と言つのは、こういう電話のことだろう。

『あの、日野さん．．．．。』

ガチャン。受話器をおいた。少し怖かった。だって、もしかするとオレオレ詐欺みたいにな、来て来て誘拐みたいな電話だったと思う。

『もしもし、』

ああやだ。徳竹の声が空耳で聞こえてくる。

『か、り、ん、さーん??』

待てよ、今は、空耳じゃない。まさか。そんなはずはない。私は、恐る恐る受話器を取った。

「もしもし．．．．?」

『アハハハ。切っても無駄ですよ切れませんから。』

徳竹は、嬉しそうに言う。

「何したのよ!!」

本当、何をしたのか？

『ちよつと一工夫。ハハハ。ま、明日、会いましょうと言うまで、切らせませんけどね。』

「絶対、嫌よ。会うもんですか。」

怒り任せに、電話のコードと、回線を引き抜いた。ブツツ。ツーツー。電話は、切れた。

「切って、キレマスよ。」

時計を見た。10時．．．。

「やばい!!」

友達から、電話がかかってくるのに。徳竹と言う男のせいで、電話線をつなぐのが、今まで生きてきた中で一番の恐怖を味あわせた。手が震える。落ち着くんだ、何度も言い聞かせる。そして、震える

手を押さえながら、コードと回線を差した瞬間、電話が鳴った！
渋谷のオフィスビル。姉の由来は、コーヒーを飲んで一息入れていた。そんな時に、電話が鳴った。

「はい。」

『こんにちは。』

「こんにちは。えっと。どちら様？」

『徳竹と言います。』

由来は、自分のデスクから、取引先名簿を調べる。

「すみません、名簿にないのですが。どちらの徳竹さんですか？」

『e p gの徳竹です。』

由来は、それを聞いて、携帯を落としそうになった。

「何で今頃……！！」

T e 1 . 2 (前書き)

留守番中にかかってきた怪しい電話。一度切ったのに！！また鳴り響く電話。はたして、電話の向こうにいるのは！？

香鈴は凍り付いた。足に根が生えているみたいに。取るべきか、切るべきか。

「どうしよう。」

電話は鳴り響く。手が震えた。心臓は、破裂寸前！

「はい、もしもし。」

私は、ほとんど無意識の状態で受話器を手にしていた。全身が小刻みに、ガタガタと震える。受話器の向こう側にいたのは、

『もしもし？香鈴？おい。返事しろー。』

友達だった。

「はあ。」

息切れしていた。

『だいじょうぶ？？』

「う、うん。ただ、大丈夫。」

『本当？息切れして、かなり動揺してるぞお？』

「ははは。何でもないさあ。」

苦笑。

『今日の12時ね。いつものカフェで。真奈美も来るって。』

「わかった。お昼に、いつものところね。」

『マジで、だいじょうぶ？』

「うん。はあ。大丈夫。じゃあね。」

『うん、バイバイ。』

受話器をおいた。床に座り込んだ。ガクガクと全身が震えた。

「こつ。怖かったー。」

しばらく、私は立てずにいた。

その頃――

姉の由来の携帯にかかってきた電話。

「何で今頃！！」

『ま、色々だね。先輩。』

電話の向こうには、徳竹がいる。

「で、何の用？ま、聞かなくても分かるけど。」

『さすが先輩。』

「今すぐ切つて。香鈴をEPGにやるつもりはないもの。」

『それは残念。後日話しましょう。先輩。では。』

電話が切れた。由来は、大きなため息をついた。なんでこんな事になってしまったんだろう。由来は、そう思った。EPG・・・香

鈴は、この組織のせいで、人生を左右されてしまう・・・。

「はあ。どうしましょ。」

由来は、ため息をつくばかりだった。

Teil . 3 (前書)

注意: espionage + 1 です! !

12:00。私は、千佳と約束していたカフェに着いた。雨が静かに降っていた。カフェに入ると、千佳が手を振った。

「ごめん。待った？」

「いいや、真奈美の方が遅いもん。それに、正午ぴったり。」

「あはは。」

私の癖は、約束の時間ぴったりに来る事。私は、店員を呼んで、飲み物を注文した。

「今日、冷えるね。」

千佳が、温かいコーヒーを飲みながら言った。

「最近雨ばかりだもんね。」

私は、アイスコーヒーを飲んでいた。

5分後・・・

店のドアが開いた。

「ゴメン。待ちましたかあ？」

真奈美がようやくやってきた。

「かなり待ったヨ。」

千佳が、腕を組んで、偉そうに言う。

「大丈夫だよ。10分ちょいしか待ってない。」

私は、時計を見ながら言う。

「香鈴、真実を明かすなよ。ま、いいか。さあ、三人揃ったところで。」

千佳が立ち上がる。

「行こうか。」

私も立ち上がった。

「いらしゃい。」

千佳の家に着いた。おばさんが、ドアを開けてくれた。

「おじゃましまーす。」

真奈美と二人で言う。

それから、レポートを見せあい、悪いところを修正した。

「そういえば、香鈴。なんで、電話した時、動揺してたの？」

私は、理由を話した。

「そうですかぁ。こわいですねえ。」

真奈美が言った。

「あんた、姉妹で美人なんだから、気をつけなよ。」

「うん、ありがと。」

それから、家に帰った。

「あ、トイレットペーパー……」

私は、近くのスーパーマーケットに行った。

ガサッ……

気のせい？背後から物音が、した様な気が。なるべく急ぎ足で、スーパーへ。安いトイレットペーパーを見つけると、すぐ買った。気配を消してる……。

「なんにもない。」

私は、走った。真つすぐ家には帰らなかった。気配が消えるまで、町内を回った。

Te1.4 (前書き)

・ ？ ？
かりん
香鈴と姉の由来にかかってきた、ちよつと怖い電話。徳竹つて一体・

家に帰り着いた。徳竹．．．。何度も頭をよぎる名前。

「なんでもない、誰もいない。」

恐怖のあまり、膝が震え、玄関の地べたに座り込む。ストーカー？
にしては、巧妙な手口。私は、涙をこらえた。泣くなんて。

「怖い。」

ただ、何度も恐怖がおそってきた。

夕食の頃になると、恐怖心は、少し冷めていた。思い出せば、かなり怖いけれど、必死にやる事を見つけた。気を紛らわしたい。姉はくたくたになって帰ってきた。おいしそうに私の作ったオムライスを食べた。

「ああ、疲れた。やっぱり香鈴の作ったオムライスが、一番だわあ。」

姉が、いつもの2倍早く食べ終わった。

「今日、食べるの早いね。」

私は、流しに食器を持って行った。食器を簡単にすすぐ。

「はあ、本当に今日は疲れたわあ。」

姉は、リビングに行き、自分の作った雑誌の出来具合を見る。独り言で、ここの文を作った後輩が、なんだか良くないなどと言っていた。

「コーヒーいれようか？」

「うん、ありがと。」

うちのコーヒーは、サイフォンでいれる。クッキーを添えて、リビングへ持って行った。姉が、コーヒーを一口飲んで言った。

「香鈴、徳竹万里から電話があつた？」

「トクタケ．．．。」

「そう、香鈴を必要としてるからね。」

「お姉ちゃん、何の話？」

もしかしたら、ものすごい事なのかしら？姉の表情が普通ではない。
見た事ないくらい本気なんのだから。

「香鈴、明日、徳竹万里に会いなさい。」

「えっ？お姉ちゃん、なにが言いたいの．．．．？」

私は、コーヒークップを取り落としそうになった。

第2章* そのカフェです。 (前書き)

この題名の意味は、この回で、明かされます!!

第2章＊そのカフェです。

学校が終わった。期末考査が近いので、部活もなく、まだ明るい道を帰っていた。大通りで、店がいくつか並んでいる、にぎやかな道だ。新しく建ったモダンなカフェを横目でちらつと見た。

「ああ、今度行こう。」

かわいい看板には、コーヒーの配達もしてくれると書いてあった。私は、頭の中でコーヒーを飲んでいる自分を想像してみたりした。

...

携帯が鳴った。画面には、「オネエちゃんハハ」と、表示されていた。

「もしもし？」

『香鈴さん、どうも。』

へっ??? 私は、耳を疑った。

「え...っ。とっ徳竹さん？」

『おお、分かったんですか。そうです。徳竹です。』

「今、どこからかけてるんですか？」

『そのカフェです。』

ええええ!!! 私は、またまた、耳を疑った。

『どうかな。おごるからさ、お茶しない？』

「あの、え、あの、んっ。」

姉の意味深な、昨晚の言葉がよみがえってきた。「徳竹に会え。」

姉は、理由なんかを話してくれなかった。ただ、本当に真剣な顔で、徳竹に会いなさい。ただ、それだけを何度も言った。

「あの、徳竹さん？」

ツーツー

電話は切れていた。チツ、と舌打ちした。

「あー、だー、もっ!!! 会えば良いんでしょ、会えば!」

私は、数メートル後に戻り、カフェに入った。

「いらつしゃいませー。」

明るく店員が、笑顔で迎えた。

「ここだよ。」

店内をきよきよと見渡す私に、少し聞き慣れた声がした。窓側で、一番端の、良い席に、若い男の人がいた。姉と同じ年くらい。

「ああ、あの人が。」

性格がよさそうな、とてつもなく普通の印象の人。さて、何を話すんだろう。

私の席に、おいしそうなケーキと、キャラメルアイスコーヒー（キャラメルカフェモカ）が、来た。徳竹さんは、紳士的な人だった。

「えつとね、何か、由来から聞いた？」

「い、いいえ。何にも。」

「そつかー。説明するのもなんだかね。」
「なんだよ。」

「ちよつとヒソヒソ話すけどさあ、単刀直入に行っても良いかなあ。」

「

「はい、全然良いです。」

私は、ストローをたてた。

「香鈴さんに、EPGへ、行く事を頼みたい。」

「イーピージー？」

「そう。espionage。」

「エスピオナージ??」

いきなりエスピオナージなんて言われてもねえ。

「アメリカは、CIA。ロシアは、KGB。さて、何の事？」

「C...ス、スパイ。」

徳竹は、うなずいた。

「えっ???!」

スパイツ!!!??

「どんなことか、まず、説明しないとね。」

「はっ、はい。」

徳竹は、EPGの事を語りはじめた。

そのカフェです・i（前書き）

このお話では、

『EPG』や、『徳竹さんと姉の関係について』の謎がついにあか
されます！！なんとなくアクセスした方は、プロローグから見
ていただく事を、おすすめします！！

そのカフェです・1

徳竹は、まず、このEPGの歴史について語った。

「日本には、スパイの団体は、無いと思われてたんだよね？」

「はい、私もさつきまで。」

・・・第二次世界大戦。日本は、敵の動きを知るために、スパイの部をもつけた。当時は、横文字を使っではいけなかったので、『日本帝国国軍軍事忍知部』と、言う長い名前だった。（にほんていくくくぐんぐんじにんちぶ）略されて、ニッテイ軍、なんて言われていた。

ここまでが、設立のわけ。

・・・1950年代。秘密情報収集活動を、英語に直し、今の『espionage』に。なんとなく、いや、いつの間にか、略されて、『EPG』に。いろんな国のスパイ活動や、”裏”の犯罪の取締に務めた。今の任務の原型が出来た。

「と、まあ、こんな感じ。」

「あの、その事は、理解できたんですが、姉との関係は？」

「ああ、お姉さんね。僕の先輩だよ。」

先輩・・・？

「って事は、お姉ちゃんは、いつから勤めているんですか？？」

「たぶん、育成部の頃からだから、8、9才の頃じゃないかなあ。」

「えええええっ！！」

小学校2、3年生の頃だよ。すごいよ。

「天才だつて、言われたんだよ。当時の呼び名は、えっと、偽名が、『神無』って言われてたから、なんだっけ。」

『神無』か。目立つ名前だよ？？

「思い出した！！『出雲の天女』だよ。」

凄いあだ名だなあ。

徳竹さんとは、話易く、1時間程話こんだ。

「スパイか。悪かないかも？」

そんな事を思いながら、家路に着き、ゆっくりと歩いて帰った。

そのカフェです・i(後書き)

良かったら、感想下さい。

by 春風ななこ

そのカフェです・2（前書き）

このお話でも、物語の秘密が明かされます！
なんとなくアクセスして下さった方！プロローグから読んでいた
だきたいです。

そのカフェです・2

19:00。雑誌の切りも終わり、次の取材テーマも決まった姉は、笑顔で帰宅した。

「ただいまーっ。」

「おかえり。今日、帰ってくるの早いね。」

私は、食事の支度をしていた。

「香鈴もじゃない。部活、どうしたの？」

姉は、上着をハンガーにかけた。

「期末考查で、部活停止なんだよ。」

「そっかー。で、先にお風呂入るわよ。」

「どうぞ。」

21:00。見たい月9ドラマを我慢して、期末考查の勉強に励んでいた。英語の勉強が、一段落ついた。

「かりーん、ケーキいるー？」

1階の方から、声がした。（2階付きマンションなのだ。）

「いるいる。」

私は、階段を下りた。リビングには、姉が、コーヒーを飲みながら、ケーキを食べていた。

「おいしそー。いただきまーす。」

いちごとチョコが美しくカット＆デコレーションされたショートケーキは、口の中でとろけた。なんて言うのかな。とっても、クリームとの相性が良い。

「香鈴、今日、徳竹に会った？」

「ん、む、うん、会ったよ。でもさあ、後々よく考えたんだけど

さ、嘘っぽくない？」

「でも本当です。」

「女子高校生をだますなんて、あまいよ、お姉ちゃん。」

「んじゃ、嘘だと思うなら、明日、ここへ行なさい。」
姉は、小さい名刺のような物を出した。

「赤坂駅6月10日am2:00集合。」

「はあ？明日って言うより、今日じゃん。」

もしかしたら、スパイって本当になれる物なのかもしれない。

「香鈴、スパイになれるって舞い上がってるかもしれないけど、最初に釘さしとくよ。」

「うん、わかった。」

「香鈴は、スパイって聞いたら、どんなの想像する？」

スパイって言ったら……。

「かつこいい最新器具があつて、毎日バンバン銃撃戦！」

「はあ。これだから。」

何よ。

「ま、最新機器があるのはひていしないけど、毎日バンバン銃撃戦はちよつと……。良い機会だからいっとくけど、もし香鈴がスパイになったとするでしょ。」

「うん。」

「銃撃戦は、すぐ死体を作りかねないわ。あなたの仲間、敵。死体の処理には手間がかかるでしょ？」

「確かに。だったら、即効で聞く毒薬は？」

「だーかーらー、その場で死なれると困るって事。」

「じゃ、後で効果がある毒薬だあ。」

「正解。こんなチマチマした、せこい世界が、スパイの本当よ。でもね、その、チマチマした内容は、とても念密な計画と、第二の皮膚の様に、しっかりと身についた、スパイの勘と、知恵と、嘘。こんな難しいのがスパイ。」

「何か、やる気失せてきた。」

「ま、後は、香鈴の好きにしなさい。」

姉は、またコーヒーを飲みはじめた。私は、ケーキを口にしながら考えた。

選択できるのは、一手。

S P Y O R

そのカフェです・2（後書き）

もしよろしければ、感想、書い頂ければ、幸いです。

第3章* T a r a g e t o f o p p o r t u n i t y (前書き)

今回は、長いです!!心して読みなまえ!!(ーい)

今回のながいながい題名の意味は、CIAのスパイ用語で、日本語に直訳すると、『目標機会』英語読みで、『ターゲットオブオポチュニティ』意味は、後書きの方に。

第3章* T a r a g e t o f o p p o r t u n i t y

ねむい。 午前2：00。 だいたい、なんでこんなところに呼び出すんだろう??

「はっ、はつくしゅん!!へっ、へっぷし!!」

私は、鼻をすする。駅は、当然閉まっており、雨がザーザー降る中、寒い寒い深夜の駅の軒下で、高校二年生の（可愛らしい）女の子が、一人で待っているのだ。まったく。世の中物騒なのに、何故こんなに待たせるのか?

「ふああ、さぶい。」

ティッシュペーパーで、鼻をかむ。時計は、2：08を指している。ブロロロロ……。

駅前のロータリーに、一台の車がやってきた。私の目の前に、見事に停まった車のウィンドウが、音もなく下がり、中には、徳竹さんがいた。

「乗って。」

「はい。」

まあ、この場面を見た人は、誘拐とか、夜中に兄が迎えにきた、なんて思う人が大半でしょう。でもね、どちらの答えも、不正解。今から私は……

車の中は広がった。家族がみんなで乗れるような大きい普通車で、外見は、黒いメッキがキラキラと光を放つ車だ。

「ごめんね、8分も遅れてしまったよ。」

こまけい!こまかいぞお!!8分位、全然OK!!

「気にしないで下さい。」

私はそれだけ言っておいた。それにしても、徳竹さんの車は高級なのかしら?それとも深夜のせいかしら??何だかとても眠くなるのは一体……???

・ZZZ・・。

「こら、香鈴！―いつまで寝てるの！学校遅刻するよ！」

気が付いたら、自分の部屋だ。姉が、母親と同じ口調で、私を怒鳴って起こした。

「えっ。。」

昨日（ほぼ今日）のは、夢だったのかなあ？そんなふうに思ったのだけれど、自分の髪の毛には、ヘアゴムとヘアピンがしてあった。テスト勉強して寝れば、そんな事はよくある。それから、自分の服装を見た。パジャマじゃあ、ありませんなあ。

「香鈴！！本当起きて！！」

「はいはい。」

まだ30分もあるのに何故そうせかせかと毎朝起こすのかね。私は、マッハで着替えると、教科書ノートをバックにつめた。もう、夢かなんだったのか、なんて思う暇もなく、学校に出掛けて行った。（もちろん、朝食は食べたよ！）

「おはよお、かりんたん。」

千佳が、私を発見して声をかけた。

「あ、おはよう。」

二人で一緒に朝日が照る道を進んで行った。

昼休み。千佳が、弁当とともに私のところへ突っ込んできた。

「大変大変！！」

私は、真奈美とお弁当を食べていて、真奈美も私も、びっくりした。（いきなり頭から突っ込んでくる人は早々いない。）

「どうしたんですかあ？」

「どうしたの千佳？？そんなにあわてて。」

千佳は、勢い良く立ち上がると、携帯を私の目の前に持ってみせた。

「みずくさいぞあ。かりんたん！！」

「？なんのこと??？」

千佳の携帯じゃないようだ。

「それ、誰の携帯電話ですかあ？」

真奈美がささず聞いた。

「あ、これは、隣のクラスのR子さんの物。」

「涼子ちゃんですかあ？」

「ドツキ、グサツ、ギツクリ。」

「凶星だな。」

私が言った。

「んまあまあ。そんなことは、どうでもいいでしょう！コレ見てよコレ！！」

携帯をさらに顔に近付ける。

「あああ！！」

真奈美が声を上げた。

「新しいカフェー！！私も行った事無いのに！！いいなあ。」

千佳ががつくりした。

「見るとこ違うよ。香鈴の隣にいる人！」

「あああ！！」

また真奈美が声を上げる。

「コレは、属に言う、カレシと言うもんですかねえ。こんなイケメンの彼氏とどこで知り合ったのかなあ。香鈴さん。」

「ええ、これはその。」

今、気付いたが、イケメンだな。確かに。

「いいいいつ、いとこだよ、ほら、いとこのお兄さん！！！！」

口からあ　でまかせえ

「ほんとに？」

「ほんとですかあ？」

「ほんとですう。」

千佳が、舌打ちした。携帯をポイツとほうりなげた。

「な〜んだつまんなあい。彼氏いない暦：17年の香鈴についに！！と、思ったのに。」

「余計なお世話じゃ。」

こんな感じで、今日の学校も無事終了。

）

携帯画面の表示を見た。

「はあ！？何コレ！！！？」

「トクタケサン∨∧〇∧∨」と、出ていた。

「はい、もしもし。」

やっぱり昨日のは、夢じゃなっかたみたい。

第3章＊T a r a g e t o f o p p o r t u n i t y（後書き）

『目標機会』の意味。

情報部が、部員に情報を伝達する情報が、相手国政府当局（敵側）から、かなりの偶然でおいしい情報が入ったときの様子を表します。しかし、今回のお話では、日本語読みのままで、目標（香鈴）と、部員（徳竹）が、近づく機会が増えた事を言っています！

T r a g e t o f o p p o r t u n i t y ・ 2 (前書き)

結構短くなりました!!!いつも読んでくれる方、本当に、ありがとう!!!

電話の向こうは、やっぱり徳竹だった。

『香鈴ちゃん、昨日はごめんねー。』

「えっ？あつ？？はい？？」

何の事がよく分からなかったが一応、返事しといた。

『昨日は、僕の車だったから、本部への道程を知られない様に寝むらせちゃったんだけど、香鈴ちゃんが本当に寝て起きなくなっちゃって……。』

ちよつとまでよ……。謝るのはこっちの方のような……。

「いいえ、とんでもないです、ごめんなさい!!」

『で、まあ、それは良いとして、アレ、見た??』

アレとは何だろうか？いいえと答えた。

『そ、じゃ、今日中に目を通していてね。』

「は、えっ!？あのつももし!!!!?」

切れてる。ただだよ勝手にかけて、勝手に切って、スパイっぽく、着信履歴のこさないし。電話もきって、私も切れさせるつもりかしら。(〃|〃)イライラ。

家に帰ると、私の机の上には、小包があった。とっても小さくて、ノートよりも小さかった。重い

全体に、メッキがしてあり、ギラギラ光るジュラルミンケースのよ
うなのノートパソコンだった。小さい『ピルキー』と、言うデータ
ファイルがあった。名前は知らなかったけど、それに書いてあった。
尖った針の様な先を横の穴にさした。

「データファイル ショリ中。」

電源も入れてないのに勝手に動いた。

「何があるんでしょう?」

私は、少し期待した。何があるんだろう?何が出るんだろう?画

面は、電子信号を繰り返す。

第四章*Novator！（前書き）

今回は、簡単な、文章です。

題名の意味を紹介。『Novetoru』とは、革新者と、言う意味。ロシア（KGB）のスパイ用語で、外国で募集したエージェントで、今回のお話では、香鈴ちゃんが、才能のあるエージェントだと言う事を示しています。（読み：ノバートル）

第四章*Novator!

コンピューターの画面。

```
10011ayx10hd10000101jsufz1010p
iod10...
dubx10101010...01ghhc01pla10...
10gd1010101...
101010111110ia...kdisqbann...
.
1010aidhd11dqecbnz...10101iwdh
hch19...akjd10...
dion1010fukuo ka1010...
...
1010100011hdhchaujsif...ji1010
.
1001010dhg...fwhdbnkakjd101...
.10akjdy...
10101010001010001jhdg...100
u...shui1010...
sjahjy10bz1pjhd f1010101010yaus11
0110jj...

```

こんな複雑な電気信号が、1や0にかわり、意味のない文字を何度も何度も繰り返す。黒い画面に、明るい黄緑色の文字が、目まぐるしくかわってゆく。時々、点滅する文字が、3秒くらいでて来た。何度も何度もかわってゆく。

ピ.....ツ。

大きな電子音がして、数秒間、フリーズした。

「Is you are KarinHino?」

Yes.

No.

こんな画面にかわった。あなたは、日野香鈴ですかって、もちろんそう！すぐに、「Yes」をクリックした。ダウンロードされた、画面には、たいした事は、書いていなかった。

*ヒノカリン

PW:17-ZVXG-291

アス、アカサカエキニキナサイ。

パソコン、ヒッキヨウグ、ジサン。

クンレンヲシマス。

訓練をするようです。受けて立とうじゃない！

第四章*Novator！（後書き）

今回は、CIA（アメリカの中央情報局）のスパイ用語を紹介したいと思います。（毎回アルファベット順に。）

Novator! 1 (前書き)

香鈴が、ついに、スパイの訓練所に行きます!!

深夜十二時。同じ駅前のロータリーには、徳竹の高級車はこなかった。少し凹んだ汚いワゴンが一台私の目の前に音もなく止まる。

「ヒノカリンか？」

強そうな女の人が、窓を開けて、車へ向かってきた私に聞いた。

「は．．．はいっ。」

「乗れ。」

反応の早い人と言う印象を与えた。私は、その人のスピードについていこうとした。なので、急いで車に乗り込んだ。乗った瞬間に、車が動き出した。ドアは、まだ閉まってなかったで、びっくりした。運転手もこれまた気の早そうな人だった。スパイの人って、こんなにも、何か、つめたすぎって言うのかな？なんかさっぱり。

「窓には寄るなよ。訓練所は、秘密基地だから、スパイのお前に知られたら、いけないんだ。」

女の人は、また無愛想に言った。

「なんで、同じスパイなのに、隠したりするんですか？」

説明が嫌いな人のようだ。『チッ』って舌打ちした。

「もしも、スパイが任務に失敗して、敵に捕まったと仮定するんだ。」

「はい。」

「そこでだな、もしも、訓練所がどこかと問われるだろ。もちろん、手には、嘘発見気がかけられている。どこかと問われても、道も知らないんだから。嘘発見気には、引っ掛からずに、自分の命も助かるチャンスの糸口にもなるんだ。」

「あ、ありがとうございます。」

だからか。と、納得。窓には、カーテンがしてあった。運転席も見えない様にしてあって、はつきり言って、あり得ないくらい、真っ暗な車内なのだ！

「なんか喰うか？」

言葉遣いの悪い女の人ね。まるで男の人みたい。

「いいえ。」

「そう。」

しばらく沈黙が流れた。マジで気まずいですわ！！（ザマス口調。）

さて、この気まずい雰囲気の中、私は、どうなるのでしょうか？

Novator! 2 (前書き)

香鈴は、美人でボーイッシュな女の人の隣にいて、会話がないまま重い沈黙が流れてます。。

Novator! 2

だいたいなんでこんな無愛想な女の人の横なんだろう？美形なんだけど、どこか、オーラが違っている。何というか、はつきり言っ
て少し怖い。

長い沈黙。

なんで、黙っているのだろう。私もその人も。話しかけても怒られ
そうだし、話さなくては、気まずいし。どうしよう？どうして。ど
うしよう どうしよう どうしよう×100・・・こんな気まず
いのは、人生で生まれて初めてだ。ききたいことは、たくさん・・・
「お前に、聞きたい事が、たくさんあるのだが。」

「は、はいい？？なんでしよう。」

「ひのゆきの妹だよな？」

日野由来って、私の姉だけど、スパイの人って、コードネーム使う
んじゃないかったけ？ま、いつか、そんな事気にしたら、気まずい
し、怖いし。

「はい、妹です。」

女の人は、うなずいた。

「そうか。あの天才と言われていたスパイの妹か。お前の活躍が、
楽しみだ。」

ほんの少し期待しているようだ。

「・・・・・・。」

少しだけ、空気が和らいだ気がする。車はどんどん進み、一旦停車
して、人の話し声がすると、また進みだした。高速に乗ったのだと
分かった。何所までいくのだろうか？

「あ、あの。」

「？なんだ？」

「姉が、どういう事をしていたか、よく話してもらってないんです
けど、知ってますか？」

少し顔をしかめる。

「私だって、親しいわけじゃないし。でも、記録を打ち立てる度に何度か、噂を耳にした。人の過去を詮索するもんじゃないとは、先に言っておくが、お前が知りたいのなら、どうだってできる。」

聞かない方が良いのかな？

聞きたい。

自分の欲は、そんな風に出てしまっている。

聞かない方が。

直感は、そう言った。

「良いです。聞きたいです。話して下さい。」

答えは言った。

「うん、そうか。どこから話せば良いのか。」

私が、もうすぐで聞き落とすぐらいの小さい音で、舌打ちした。やっぱり怖い。ため息をついて、数秒間黙ったままで、やっと言葉を見つけれたらしくて、やっと語り始めた。

「おまえ、姉の入った理由なんかは？」

「入ってた事以外何も知らないんです。」

うんとうなずいた。

今から、ちょうど、20年前。姉の由来は、6歳。

「いき、お遣い行ってきたてちょうだい。」

「はぁーい。」

もうすぐで、一年生になる頃だった。

epg内では、優れたスパイの不足に悩み、子供の育成に目を向けていた。年齢は、今年、7歳になる子供達。由来も、その中のターゲットだった。

「いつてきます。」

由来は、商店街へと向かった。パンをかって、ももいる通りをぬけて行く。

「あのこかぁ。」

由来の後ろで、誰かが笑った。

ザッ．．．．

「えっ。」

由来が声をもらした。次の瞬間、

Novator! 3 (前書き)

幼き由来は、どこへ誘拐されるのでしょうか？6歳にして、冷静沈着な由来。ここからスパイの本能が伺えるかも？！

Novator! 3

気が付くと、車の中に放り込まれていた。暗いトランクの様なところに押し込められ、息もしづらい。だいたいなんでこんな目に遭わなくちゃいけないんだろう？ 幼い由来は、そう思った。

「急げ。怪しまれると難だからな。」

「はい。」

そんな会話が、向こうから聞こえてきた。手足は、自由なのに狭くて寝返りをうつくらいがやっとだった。車が一旦停車した。

「横断歩道のメロディーが聞こえた。ここは、町中のような。人の声も多々聞こえる。たぶん、ここは……。」

「うわっ!!」

もう少しで思い出すところで、車が急発進した。由来は、思いつきり頭をうった。車は、どんどんスピードを上げる。トランクの隙間から、町がもうスピードで、後ろへ駆けてゆく。由来は、6歳にしては、とても冷静だった。泣くも喚くもせず、黙って、静かに自分がどのような状況で、どんな事になっているのか冷静に分析し、自分が助かる事を考えた。

「多分私は、怖い人に誘拐されているんだ。」

独り言を呟いた。

「あの町は、みつっ目の駅だから、しばらくいても、今持っているお金で十分帰れる。」

お遣いのお金を、手だけで確かめた。

「ギザギザ。つるつる。おおきい。」

多分由来の予想では、874円は残っていると予想した。（正解。）

「コレだけなら、市を出てもまだいけるよね……。」

でもよく考えてみよう。まだ小学生ではないのだ。

「あつ。」

本人も気が付いたようだ。

「」

また一旦停車

した。本人の予想外の事がおこった。トランクが、急発進したせいで開いたのだ。ガバン……

「チャンス!!」

と、思ったのだが、車は猛スピードで、しかも、いつの間にか高速道路の真上だった。無理だ。ここで飛び下りたら、助かっても、後からくる車にひかれる。

「おいっ！トランクが開いてるぞ!!」

誘拐犯に見つかってしまった。でも、もしかしたら、コレもチャンス!?

「どこかで一時停車するか？」

ほら。不意をついて逃げるチャンス!!

「いや、いい。」

「だったらどうするんだ??」

由来もどうするのか首をひねった。

「どうするのかな？」

「お前は、とにかく急げ。」

「はい……。でも。」

「でも？」

トランクが風に当たり、音を立てる。

「い、いいえ。なんにもねえです。」

「ならよろしい。」

ウィーン。窓の開く音がした。車の屋根の窓だ。

「まさか。」

彼?彼女?は、車の屋根によじ上り、由来に言った。

「首。」

「はい？」

「首引つ込めて大人しくしてろ。」

由来が、元の体勢に戻った瞬間、ガツン。と大きな音をたてて、トランクの蓋が閉まった。由来は、ちょっとした恐怖心におそわれていた。うちにはお金はそんなにないわ。なのになんで私をさらうの

かしら。ほんの3ヶ月前に、田舎から、すこーしだけ町に出てきた
だけなのに。。
車はどんどん進む。

Novator! 4

こんな話は、少し信じがたい。でも、私の姉なら、あり得る。

車が止まった。大人しく待っていてけど。このトランクから、出す瞬間、このすきについて逃げ出そうとした。すぐ逃げ出せる様に、軽くストレッチした。

「いいか。このあと．．．。」

「わかつてる。」

声が近づいている。チャラ。鍵を出す音がした。もう少し。もう少しで開く。はやくはやく。ドキドキと心臓が唸る。ガチャッ。鍵を差し込む音。もうちょっと。後、ほんの少しで開く。トランクの隙間から、光が差し込む。10、9、4、3、2、1、

今だ！

由来は、絶妙なタイミングで飛び出して、相手の脇の間をすり抜けた。

「なっ．．．!!」

相手も、少しとまどった。

「待て!!」

由来は、茂みに隠れた。山の中の様だ。折れた竹やぶの中に隠れた。由来の目の前を”誘拐犯”が右往左往する。

「どこだあいつは。」

不機嫌に足を踏みならす。

「俺に聞かないでくれ。」

「探せ。」

バキッと、竹をおる。凄い力。

「はあはあ。」

ドキドキして息が荒くなる。ここから動かないと見つかるのは時間

の問題。動かないと。動かないと！！絶対に見つかる！！！！今相手は2人。

「どこだ。何か。まだ6歳だろ？なんでこんなにスパイ要素むき出しなんだよ。」

また枝を折る。

「探してくれよ。」

「試験もこの調子だったら合格ラインだな。」

由来の隠れている竹の前で止まった。

「はっ。」

由来は、すかさず手で口を覆った。

「日本と言う国のために、スパイとして働け。」

「？」

「お前の選ぶ道はそれしかないんだ。」

それだけいうと、回し蹴りしたかと思うと、竹の枯葉がクルクルと回転しながら陽の光に照らされて黄金色きんいろに光りながら、空中を舞った。

「来い。」

その人は、由来に手を差し伸べた。

第5章＊無人ビル（前書き）

今回は、ついに、ついに、香鈴がスパイの本部へご到着！！さて、無愛想な女の人と共に、何が待っているのか楽しみ！！

第5章＊無人ビル

まだ話がこれからと言うところなのに。道が悪くなったと思ったら、停車しちゃったし、着いちゃったし。

「すまないな。話の途中なんだが、到着だ。降りろ。」
相変わらずの命令口調。

「はい。」

私はなるべく素早く降りた。小石がごろごろ転がっている汚い空き地に、なんとも最悪な無人ビルがあった。ここがスパイの基地？！と、思ったが、後で納得できる。

「来い。こっちだ。」

「あ、はい。」

ビルの周りを回る様な形で入り口に向かった。『コ』の字型のビルで、所々にひびが入り、カビで黒ずんで汚れていて、窓ガラスはなんとか割れていないものの、ほこりで真っ黒。少しでも触ったら、パリッと、音をたてて割れてしまいそう。

「着いた。」

玄関だ。ガラスのドアの壁に、比較的新しい機械がくっついていて。「どこだっけな。」

少し時間をかけて、ポケットからカードを出した。

「ピーーーーー 確認シマシタ。」

機械が喋った。ドアのロックが解除された。

「先に入れ。」

ドアにはノブがないので、足で押さえている。

「ありがとうございます。」

「ふっ。」

意味深な短いため息をついた。

古いボロボロのロビー。滑りそうになる廊下。冷たい鉄のドアが

並び、暗い階段を上る。廊下をずっとずっと真つすぐ進んで、まん中の建物につくと、暗い螺旋階段を下る。少し明るいロビーに着いた。月明かりでうつすら照らされている。足音が響く。

「挨拶はしろよ。」

「？は、はい。（？）」

おんぼろなエレベーターの前にとまった。ゴウンゴウンと、大きな音をたててエレベーターうごく。この建物は相当古い様だ。だってエレベーターの場所をさす看板に、”自動昇降機”って書いてあるんだもの。ありえねー。ゴウ。ドアが重々しく開いた。中は、明るいけど、何か怖い。お化けでも出そう。階の番号が点滅して、上へ上がる。

「ふう。」

ため息をついた。

「着いたぞ。」

また重々しく扉が開いた。そこには、信じられない光景が。

無人ビル 1（前書き）

香鈴は、スパイになります！！本当に！！！！

無人ビル 1

ドアの向こう側は、おんぼろビルとは思えない程、キレイで、かつこいい！！どんな風かつて？それはもう、一流会社のオフィスの様に洗練されていて、シルバー、ブラック、ホワイトの色で統一されていて、デスクやいす、パソコンやコップなんかの物は、アルミのシルバーがキラキラ光る。

「すごい。」

思わず声が出てしまった。床は、黒の大理石で、所々に白い大理石がラインを引いた。歩くと、コツコツと、良い音がした。オフィスの仕事をするスペースは、オシャレなデザインにカットされた曇りガラスで区切つてある。

「ぼやぼやするな。早く歩け。」

「す、すみません。」

廊下をまっすぐ行くと、すこし特別な部屋があった。

「失礼します。」

女の人が挨拶した。

「こ、こんばんは。あゝえゝ。はじめまして。」

室内に入った。そこには、いかにもスパイの”お偉いさん”と、言う雰囲気放つ大柄なおじさんがいた。

「はじめまして。ミス・香鈴。」

女の方は、頭を下げた。

「下がつてよろしい。ミス・今井。」

「はい。失礼します。」

ドアが静かに閉まった。曇りガラスに映った影が、遠ざかつて行った。ああ。私一人にならなきゃ行けないのか。少し寂しくなった。

「では、君が何故、ここに呼ばれたかは分かるかな？」

「はい。」

「では、今日から、日本のスパイとして働く事を誓うか？」

「.....」

沈黙が流れた。

「私なんかで良ければ。」

「うむ。よろしい。ま、一夜にして大物スパイになる奴はいない。

そこだ。これから一ヶ月程、君にスパイの育成プログラムに参加していただく。ええ、その、君はまだ学生かね？」

「はい。高校二年です。」

「うむ。そうか。まあ、大変だろうがよろしく頼む。」

「はい。」

「では、君に、同意書を書いてもらおう。」

紙とペンが渡された。立ったままで同意書にサインをした。長い同意書だった。普通なら、例えばだけど、『あなたは、スパイになる事を同意しますか？』と、言う程度だと思うが、死んだ時のためだろうか？血縁関係から、聞いても良いんか？？と、思う様な個人的な事まで、1から10まで3ページに渡る同意書を書いた。

「書いたかね？」

「はい。一応全部うめました。」

「うむ。よろしい。」

同意書を渡すと、やっとソファアに掛けて良いと言われたので、遠慮なく座った。

5分後。 かつこいい、アルミの薄い箱の様な物にカードと、データピルを渡された。

「君に、徳竹隊員から渡されたと思うが、あのパソコンは、今日から君の物だ。大切に遣いなさい。」

マイパソコン！！し、幸せだあ。

「はい。ありがとうございます。」

「失礼します。」

怖い人、つまり、今井さんが私を迎えに来た。また廊下を歩いて、車へと向かう。

「よかったな。」

「はい。」

「今日からお前のプロベিশヨナー、つまり、先生の様な物に、私
がなる。」

「はい。よろしく願います。」

「こちらこそ。それと、自己紹介していなかったな。」

「はい。」

「今井だ。よろしく。それから、日野。お前はスパイ名を決めなく
てはならん。」

「名前、変えるんですか？」

「何か格好良い名前を……。」

「そうだ。目立たない名前にしろ。ちなみに、男女の区別が付きに
くい様にしろ。」

「んー。」野田ユウキ”なんてのはどうでしょうか？」

「よし。野田ユウキだな。帰ったら、忘れない様にパソコンに登録
しろ。」

「はい。」

階段を下りる。

「今日からこっちの世界では、野田ユウキになる。わかったな。」
「はい。」

無人ビル 1（後書き）

今回のお話は、文章が多くなっちゃったかな。

「（^| ^ ;）」

無人ビル2（前書き）

今回は、香鈴が慣れないスパイ名に戸惑いながら、スパイとして進みはじめようとします。

無人ビル2

翌日。学校で、少し寝不足になりながら授業を受けた。眠い。放課後の部活は、いつものメニューがきつく思えた。

「日野！もつと早く！！みんなが迷惑するぞ！！」

「すみません！！」

私は水泳部。いつものメニューと言うのは、50メートル一本で、ブル（手だけ）10本。キック（足だけ）10本。スイム（全部）10本、ウォーミングアップ・ダウン200メートルずつ。大会が近いので、リレーの練習なんかも合わせると、3500メートル毎日泳ぐ。

「おわり！！」

今日の練習が終わった。

「香鈴、今日調子出てくない？」

「うん。ちょっとね。」

苦笑。

「今月から大会あるんだから。体調整えときなよ。」

「うん。」

私は、深いため息をついた。もう7月か。夏のオンシーズンしかないうちの部活は、大会が、夏にひっきり無しにある。21日の区大会を先頭に、大会だらけの夏が幕開け。そんな大事な時期なのに、スパイになっちゃったんだよね。

「はあ。」

また、深い深いため息をつく。今日から、スパイの育成がある。身体、もつかな？

夜10時。今日は、家路に着かず、駅へと向かう。夢月町で降りた。階段を下り、駅の南入り口で待つ。この間のボロボロワゴン車が、静かに私の目の前に止まった。

「こんばんは。」

「おう。」

挨拶をした。今井さんは、クールに決めたスタイルで、見とれてしまった。いつも、ブラックのスーツに身を包んでいるのだ。見とれない人はいないと思う。

「野田。」

私は、運転手の人を呼んだのかと思った。

「野田。お前の事だ。」

「えっ？はい。すみません。」

「なるべく早くこの名前になれるよ。」

「はい。」

今井さんは、カッコいいシルバーの手帳を開いた。

「連絡だ。」

パラパラページをめくる。

「今日から、私が、正式にお前の教官として就く事になった。」

「はい。」

「で、今日は、えーっと。これか。正式なデータディスクを作成したり、訓練の過程の説明会があるし、お前の専門を、十日までに提出したい。ま、先の事だが、今日中に決めておいた方が楽だ。」

「はい。よろしくお願いします。」

私は、今言われた事を頭の中で整理した。相変わらず、車内にはカーテンが閉められていて、真っ暗なのだ。また気まずくなりながらも、昨日よりは、少し楽だった。

夜11時。やっと着いた。無人ビル。今思ったのだが、本当にすごい！光が全くもれていないのだ。あんなに明るいのに。

「ユウキ、どうした？」

「いいえ。何でもないです。」

二人で裏に回り、それぞれカードを通した。

「カードの通しかたは分かったか？」

「はい。少しまよったけど。」

「そうか。」

あの古いエレベーターの前に着いた。エレベーターは、重々しい音をたてながら上がってくる。

「お疲れ様です。」

「こ、こんばんは。」

中から、人が出てきた。予想外。

「今から任務か？」

「まあな。じゃ、行ってくるよ。」

「おう。」

今井さんが言うと、ドアが閉まった。同じスパイの仲間なのかと実感。ドアが開くと、昨日来た所で、また、いい音のする廊下を歩いた。突き当たりのお偉いさんの部屋には入らず、Ｔ字型になった廊下の右に曲がった。それから、大きな白いドアを開けるとマンガ喫茶の様に個室に区切られた部屋に来た。でもやっぱりスパイの隠れ家。個室のドアは、曇りガラスか、銀色のドアだった。

「ユウキ、カードの番号は？」

「え？ちよつと待って下さい。」

私は、カードをポケットから取り出した。

「N1468。」

「そうか。」

もう少し歩くと、曇りガラスのドアの個室があつた。壁は、白。

「ここが、お前のオフィスになる。」

シルバーの文字で、番号がドア側の壁に印されていた。

「ありがとうございます。これから、私は、どうすれば？」

「パソコン持ってきたか？」

「はい。」

「配線につないで、データーピルの情報を見とけばいい。何か飲みたかったら、この個室の集まりの部屋の中央に、コーヒーのセルフがある。それと、紅茶とレモンスカッシュがあるかな。」

それだけかな？と、私は思った。

「11:40から、今日連絡した内容がある。」

「はい。」

「オフィスには、それ以降出ない事。1：45には終わる。」

「はい...。」

また眠たくなりそうだ。

無人ビル2（後書き）

次回は、訓練の日々！実際に私も同じ事を行ってみたいんですが、きつかった！溺れそうになった！！お楽しみに！！

第6章* プログラムスタート！（前書き）

香鈴の本名なんだっけ？

第6章＊プログラムスタート！

個室は、オシャレで、明るかった。白を基調としていて、デスクはシンプルに、引き出しなどはなく、机の上に、本立てがあるだけだった。部屋の広さは、二畳半程の広さで 後ろには、棚があった。暇なので、しばらくデータに必要な事を書き込みながら、レモンティーを飲んでいた。香りが良くて、おいしいレモンティーだった。パソコンをいじっていると、時間になったらしく、いきなり画面が変わった。データピルなどは、抜く様にと指示され、しぶしぶ抜いた。

「今から始まるのか。」

「準備は良いですか？」

データピルを抜くと、新しい画面が表示された。クリックすると、また画面が変わった。

「ロード中・・・ 7 / 4」

1分立つと、画面がまたかわり、プログラムがスタートした。

「Espionage spy＊」

文字が、次々に出てきて質問をしてきた。30分も質疑応答を繰り返した。パソコンの画面が変わり、休憩の表示をした。

「休憩：5 min」

「やったー！休憩だあー！！」

私は部屋を飛び出し、走ってコーヒーマシーンのところへ行き、急いでレモンスカッシュをコップに注いだ。また、静かに走り部屋に戻った。

「休憩：1 40」

よかった。間に合った。私はほっとした。ピーツと、音がして、また始まった。

「ああ。疲れるな。」

「プログラム内容・・・」

と、表示された。色々と、訓練について説明が。

「スリーマンセル（三人一組）制。」

さてよ、私以外に2人一緒にプログラムに参加するって事！？えー
っ！！

第6章* プログラムスタート！（後書き）

このお話と同時平行で新連載する予定です。

プログラムスタート！*1

その他色々な連絡事項が、知らされた。深夜 0:00。今井試験官が、私のオフィスを訪れた。パソコンのプログラムが終了し、次は、三人一組のチームの発表のはず。このチーム決めは、EPGの内部調査で、事前に、私たちにランキングが付けてあるらしい。チームの力が均等になるように、すでに決められている。

「ユウ、ついて来い。チームの発表だ。」

「あ、はい。」

オフィスの電気を消した。ちょっと違うエレベーターに乗り、下へ降りた。また暗いボロボロの廊下を通って、隣の塔へ来た。そして、ドアから入ると、少しボロボロな部屋に、数十名の受験者が、いた。空いているところに適当に座った。それから数分経って、チーム決めがあった。

「ガール＆ボーイズ、こんばんは。チーム決めの方法は、知ってる。で、まずは、ランキングを発表したいと思う。」

私は、この人たちの中でどれ位なんだろう？

「30名中、第30位、得剥田 涼。だい29位、西田 メイ。 . . .」

まだ私の名前が出てこない。結構、上の様だ。 20位、18位、14位、 、 、 10位、 、

まだまだ私の名前が出てこない。かなり、上位の様だ。 9位、7位、 、 、 5位、 、 4位、3位、

「第2位、中原 杏。第1位、日野香鈴！以上！」
は？何ですって？！

「次は、チームの発表。A班、安恵試験官 . . . 。」
私は信じられなかった。何かの間違えだ。ってゆーか、本名でランキング出すなよ。

「G班、日野、得剥田、中溝。」

私は、G班か。

「以上！各試験官について行きなさい。」

「はい。」

私は、今井さんを探した。居た！と、思ったら、他に2人の男子がいた。この人達と組むのか。

「よし、揃ったな。まず、奥に行こう。」

他のチームは、さっさと外に出て行っているのに、なぜか、私達だけ、中に残ってミーティングをする事になった。

「まず、自己紹介をしよう。私の名は、知つての通り、今井だ。今後は、”今井試験官”と、呼ぶ様に。わかったな？」

「はい。」

「よし、じゃあ、ユウからいけ。本名と、スパイ名を言え。それから、年齢かな。」

「はい。えつと。私の本名は、日野香鈴。スパイ名は、野田ユウキ。17才よ。ええつと、これから、色々よろしく。」

今井試験官はうなずいた。

「次。」

「俺か。本名は、得剥田涼。スパイ名は、水野涼。年齢は、18。よろしく。」

「僕は、中溝真中。スパイ名は、中溝大地。よろしく。」
今井試験官はうなずいた。

「えつと、確か、涼とユウは、同じ高校だろ？」

「え？そうなんですか？」

「まてよ、得剥田って・・・。」

「せせせせせ、先輩！！？」

「ここここ、後輩！！？」

「やっぱり！知り合いだった・・・！」

「顔見知りじゃないのは僕だけかな。」

中溝君が言った。

プログラムスタート! *1 (後書き)

こんにちは。作者です。いつも読んで下さって、ありがとうございます。

今回で、やっと、20 部分を迎えました!!
ハ(^ v ^) / () ()

プログラムスタート*2（前書き）

今回、試験の最終日を迎えた香鈴達。ちょっと頼りない中溝君は、果たして、大丈夫なのでしょう？

プログラムスタート*2

あの夜から、気が休まらなかった。夜はスパイの訓練。昼間の部活や学校生活で先輩に顔を合わせてしまい、時々授業中に徳竹さんのマナーの悪いメールが……。

そんなこんなで、夏休み。もうそんな生活にも慣れ、最初の頃悩まされていた寝不足も、平気になった。今日もまた訓練がある。いつになったら、任務が与えられるのだろうか？私も、その他の研修生達も、苛立ちが目立ち始めた。

「よし、みんな揃ってな。」

今井試験官は、また張り切っている。そして、手に持っている”ブラックリスト”を取り出した。これには、今夜行っ地獄の特訓のメニューが書いてある。

「今日は、ここか。よし。えー、みんな、今日はこの近くにある湖までランニングで移動！」

えーっ。と、言いたくなかったが、喉までもどした。

やっと、湖まで来た。重りの入ったコートを着るなんて、どうかしてる。体が思う様に動かないし、膝より下に垂れたコートの裾の重りは、いっそう重たく感じる。

「野田さん、今日、アレですかねえ。」

中溝君が言った。私達の他に、何チームかが見えて来た。総試験監督までいる。

「確実に、アレだね。」

私が言った。

「みんな、集合ー！」

総試験監督が、馬鹿でかい声で召集を行った。

「今日は、みんなの中にも気づいた人もいるだろう。今夜は、チー

△対抗戦を行なう!!」

やっぱり。1番になっても結局何にもないんだよねえ。

「あそこに見える、島のような岩が湖のど真ん中にある。」

暗くて見えないよ。

「そこに、データディスクを置いている。それを取って、ここまで戻って来い。」

総試験監督は、でっかい旗を、地面にさした。

「それから、このコートは着用したまま。一人、ツールは三つまで途中で、試験監督が、邪魔をする。制限時間は、1時間半。それでは、始める。」

今井試験官が、電光掲示板のタイマーのスイッチを押した。

「おお、おい、いくぞ!!」

「ええーっ!!ちよつとまって。」

他のチームは、慌てて動き出したのだが、私達の班だけ落ち着いて話し合った。

「こんな風に、三角形の形で進む。先頭に、日野・・・じゃなくて、野田。後ろに俺達がついて、試験官達から守る。各自、酸素ボンベと、通信器具を持って行く。」

「わかった。」

「OK。」

私達が、了解すると先輩は、うん、と、うなづいた。

「じゃあ、行動開始。」

私は、言われた通りの物を持ち、データプログラムのセットを持っていた。これならたくさん入っているし、三つまでの基準も満たしている。

ピー・・・。。。。。

「こちら、水野。前方、異常あるか?どうぞ。」

ピー・・・。

「異常ないです。どうぞ。」

ピー・・・

「後方、左、何者かがついてます。どうぞ。」

中溝君の方向だ。ちょっと心配。私達は、5メートルの距離を保ちながら、進み、湖の地面から1メートル上をいく。
ピー。。

警戒音になった。中溝君の方からだ。

プログラムスタート*3（前書き）

中溝君は、助かるのでしょうか？

香鈴は、任務を成功させるのでしょうか？

先輩は、どう判断するのでしょうか？

『本当のスパイ』になるために、訓練を終えることが、出来るのでしょうか？？

プログラムスタート*3

中溝君は、もがいて、私達に、先に行く様にと言った。私は、先に行くかと迷う。

「さ、先に行つて下さい!!」

ピー。。

「んなこと出来るかぁ!!何してる?捕まったのか?なら、倒せ!!」

ピー。。先輩は、無理なことを言っていた。

「先輩!!任務を優先して下さい!!」

ピー。。私は、スパイの訓練場に来てから、優先順位をつける癖が着いた。今やる事は、仲間の救助より、任務が優先と考えた。先輩は、どう思っているんだろう?

「野田!お前は、任務をやれ!!俺達は、すぐ来る!!」

ピー。そんなことかと思った。

「了解。」

私は、すぐ泳ぎ出した。中溝君は、足を掴まれていて、そのまま岸に戻されるところを、なんとか先輩が、救助し、私の援護に再び着こうとしていた。

その頃、私は。。。。

「ゲホッゲホッ。み、水飲んだあ。。」

完全に、むせていた。私は、島の中心に行き、データのコピーに取りかかっていた。プラグをつなぎ、折り畳みのパソコンを開いて色々なコードを解読した。ここ数日間の訓練のノウハウを、フルに使い、訓練の日々からぬけて、ちゃんとした、『ほんとのスパイ』になるために。わたしは、コピーしたデータを大切に持ってかえつて、途中で、試験官達に捕まらない様にと必死でもって帰って来て、後で先輩達と合流。こんなに短くまとめているけど、本当に、本当

に、本当に、

辛かった．．．．．！！！！

「合格。」

この二文字が言い渡された瞬間は、人生で、一番嬉しかった．

．．！！

それから、三日程、連絡が来なかった。先輩とも話したけれど、何も無い様だ。

ブルルルル。電話が鳴った。

『日野香鈴。』

「はい、どちら様でしょうか。」

私は、涼しげに言いつつ、内心、”任務が来た！！”と、かなり興奮していた。はつきり言って、押さえきれないくらい、わくわくしていた。

「緊急だ。任務を言い渡す。一週間分の着替えと、パソコンや、その他のツールを忘れずに、本部に来い。」

「了解．．．。」

プログラムスタート*3（後書き）

最近、任務や、部活が忙しくて・・・。
（>|<:）汗。

第7章*仮任務？（前書き）

今回は、少しショックな真実が発覚。香鈴は、何も思わず、心を捨てて、任務を優先することを要求されます。果たして、その任務内容とは？

第7章＊仮任務？

今日も、晩ご飯は、私を作る事になっていた。めんどくさいと何度も思ってたけど、私以外に誰が作るのだろう？仕方ないのだ。私と姉の二人暮し。

「安売りだよ。」

「きゃあああ！！」

私は、おばさん達をはね除けて野菜を取り上げた。ここはスパイの力の見せ所。とれなくて悔しそうなおばさん達をよそに、私は、さっさと買い物をおえた。今日は、少しワクワクしていた。だって、今日は、「初任務」の日……！！

緊急だ。すぐ来い。と、言いつつ、予定が延期した。だから、今日私が任務に行く事になっている。先輩も、ワクワクしていた。プルプル。。

「はい？」

『野田か？今日の九時に、夢月駅に来い。』

「はい。ゆめつき駅ですね？」

私は、買い物のバックを肩にかけた。

『おくれないうちにしろ。』

「了解。」

私は、電話を切ろうとした。

『あ、待て待て。お前の姉さんにも、この任務をばらすなよ。絶対にだ。』

「？え。あ、はい。。了解しました。」

『姉には、合宿があると言っておけ。』

「は……はい。了解しました。」

私が言うつと、すぐ電話が切れた。何故だろう？何故、私の姉に言っではならないのだろうか？私の脳裏には、三つの文字が浮かんだ。
”密告者”インフォーマー……。

「そんな、お姉ちゃんがインフォーマー何て、ありえないからー。」
私は、早歩きで家に戻った。

午後9：00。私は、夢月駅のホームに立っていた。先輩も、中溝君もいた。時間きっかりに来るとは関心だ。と、言いながら、今試験官も来ていた。スパイの心得。5分前でも、5分後にも来ない。その時刻ジャストにくる事。試験官とともに、午後9：07発特急の電車に乗った。切符は前もって渡されていた。

「あその席が空いている様だ。」

試験官が言った。私達三人は、空席に仲良く座った。

「今日は、”初”だな。私も、教え子と供に、仕事をするのは、実は初めてだ。」

試験官は、小声で言った。

「今日の内容は、どんなものなんですか？」

中溝君が言った。

「そうだな、野田。お前にはショックかもしれないが、お姉さんが、インフォーマーと発覚した。」

「やっぱり……か……。」

「気にすんなよ。」

先輩が言った。中溝君も、目配せした。

「ありがとうございます。良いです。密告者が、誰であろうと、機関に影響を与えているのには、変わらない。身内の事より、任務を優先するわ。」

私は、そういった。みんな、感心した様子だった。でも、私は、自分にそう言い聞かせていた。

* — (前書き)

今回は、香鈴が、スパイとして、すこ〜しずつ芽生えていくお話です。

私達は、電車にゆらり揺られてやってきた。まず、東京都本部にやってきた。立派なオフィスビルが並び、私達は、怪しまれない普通の感じで、銀座の、あるデパートに入った。

「デパートに何があるのかな？」

中溝君が、首を傾げた。

「さ、さあ？」

私は、先輩の方を見た。

「知らねえ。」

「だよねー。」

私達は、デパートの裏に来た。季節は、まだ夏。照りつける日射しは、厳しかった。私達は、しばらく外で待たされた。毛穴がぱくぱく開いて、汗がだらだらと出た。今井試験官は、多分誰かを呼びにクーラーのきいた、涼しい部屋に入った。私達は、もう暑くてたまらない、と、思ったときに、裏口の駐車場が音をたてて開いた。

「お前達、乗りなさい。」

今井試験官が、窓から声をかけた。私達は、急いで乗った。（暑いから。）

1時間後。私達は、涼しいクーラーのきいた車の中で、任務を着々とすすめていた。私は、スパイとして、精神的に育っていく事が、わかった。みんなで、分担して、仕事をテキパキとこなす。今井試験官は、表の顔は、デパートの店員だそうだ。そして、しばらくして、渋谷のオフィス街についた。

姉の雑誌編集事務所の前で、車を止めた。今は、お昼休み。姉が、会社から出てくるのを、待った。張り詰めた空気の中で、事務所の窓の大きな雑誌の広告が、その場にそぐわなかった。

姉が出てきた。今日は、行動監視だけだったが、私は、ある事を心の底から思った。

。 姉を捕まえてみせる。他の誰でも無い、私が . . .

* ー ー (後書き)

おひさしぶりです！

作戦決行。（前書き）

いよいよ密告者と判明した姉を追いつめる。絶対、私の手で姉を捕まえると決心する香鈴。果たして、運命やいかに・・・！？

作戦決行。

私達は、姉の後を追った。姉は、不自然な行動を取った。お弁当を買ったあと、何故か公衆電話からPCを使ったのだ。それから、数分後。電話が鳴った。姉は、電話を取ると、20秒程度の簡単な会話をして、すぐに切ると、会社へと戻って行った。

「電話の通話暦を調べよう。」

中溝君が言った。

「盗聴器や逆探知機を仕掛けてないんだから、無理だよ。」

私が、否定する。でも、もしかしたら。と、みんなが思ったので、電話ボックスから、情報を引き出してみた。すると・・・。

「0348-687-1234・03-3546-1717・・・
0000-xx-x2x4xx6・・・。」

いろいろな番号の中から、で示された番号があつた。多分これは、『密告者』と言う、仕事先の番号だろう。姉への疑いが、ますます広がるばかりだった。私は何度も姉を捕まえる事ばかりを考えていた。

そして、夜。中溝君が裏に回った。ここは、とある公園の中。出入り口は、1つ。しかし、住宅に囲まれたこの大きな公園は、木を登って、垣根をまたごせば、一気に道に出る事が出来る。その一番出入りしやすい場所に見張りをつけた。会社の前には、先輩がいて、公園へ行く道の途中には、試験官がいた。そして、私は・・・。

「うー、なんか、蒸し暑いなあ。夏の夜の公園ってのは。」

私は、制服を着て、まるで、『あら、偶然会ったわね。』と、言う感じでふるまうため、公園のど真ん中にいた。今、ふと考えたのだけど、なんのために旅行道具を持ってきたんだろ・・・？

「うー、集中集中。」

私は、身体を揺すった。それから何時間と待った。しかし、作戦失

敗。何時間経つても来ない。その時だった。携帯が鳴った。

『おい、聞こえるか？お前の姉さんは、今、ホテルに入って行ったぞ。』

「はあ?!」

『落ち着け。中溝にも言え。今ホテルの位置をメールで表示すつから、2人で向え。』

「は。はい。」

私は、信じられなかったが、またまた自分に言い聞かせた。姉は、もう20歳を過ぎているんだし、少々事で...ねえ...。本音は、密告者と言われたときよりも、結構イタイ。

「中溝くーんつ。行こう。」

私は、草の中にいる彼を引つ張りだして、走って向かった。遠くもないところの普通のホテルだった。ホテルの裏に回ると、試験官がもういて、私達に手招きした。地下の駐車場に、黒いワゴン車とめてあって、その中には、既に仕掛けられたカメラと盗聴器が、この車に、情報をもたらしていた。

「きたか。別にやましい事はしちやいないぜ。」

私は、ちよつと安心。

「今、取り引きをしている。」

「そう。でも、どうやって部屋に取り付けたの？」

私は、試験官の顔を見た。

「うむ。それは、かんがえればわかるだろ？」

ひと

ちよつとカタコトの言葉で返された。やっぱり可愛くない女性。私は、モニターを見た。姉が何かいろいろと話す。

「よし。そろそろだ。お前達、準備しろ。現場を押さえるぞ。」

「はい。」

今井試験官は、今井情報部員の顔つきに変わった。私達は、ささつと道具をつけ、ホテルへ乗り込んだ。

『こちら、A。準備OK。』

『こつちもOKだ。』

私も、配管を必死でのぼり、耳に手を当てる。

「えー、こっちも良いです。OK。」

『では、みんな頑張れよ。今から作戦決行・・・！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1468a/>

espionage+1

2010年10月28日08時15分発行